

京都と文学

田頭 克浩

(2019 年度入学 鈴木ゼミ 3 期生)

私は京都に来て 3 年目になります。小学生の時に一度修学旅行で京都を訪れた際は、あまり魅力を感じられなかったのですが、その後文学作品に登場する京都に興味を持ち、実際にその舞台を訪れたいと思いました。京都は古来より都として栄え、数多くの古典・文学の舞台となり、日本文学を中心となってきました。今回は特に私が興味を持った三つの作品と、それにまつわる京都について紹介していきます。

『方丈記』 鴨長明

鴨長明による鎌倉時代の随筆。『徒然草』、『枕草子』とならび日本三大随筆に数えられます。作者の鴨長明の父は下鴨神社の神官を務めており、恵まれた幼少期を過ごしました。しかし、将来の出世の後ろ盾となるはずであった父を早くに亡くし、鴨長明は神官の職を得ることができませんでした。その後、50 歳で出家して歌人として生計を立てていきますが、生活は決して楽なものではなかったようです。『方丈記』では当時の都で起きた飢饉や天災と自身のさまざまな苦難の経験を反映して、「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず…」という世の無常を感じさせる文に始まり、移り変わりの激しい世の中をどのように生きていくかについて自身の考えを述べています。時代や社会の構造は異なるものの、変化が目まぐるしい現代社会にも通じる考え方もあり、今を生きる我々にも心に響くのではないかと思います。下鴨神社の摂社である河合神社には、鴨長明が晩年の生活を送った「方丈庵」が復元されています。



賀茂御祖神社（下鴨神社） 楼門

『古都』 川端康成

呉服商の一人娘として育った娘が、北山杉の村で見かけた自分とよく似た村娘と祇園祭の夜に偶然出逢うという川端康成の長編小説です。この作品には京都各地の四季折々の美しい風景と「きもの」、「西陣織」をはじめとする伝統文化、京都の代表的な年中行事である「祇園祭」、「葵祭」が盛り込まれています。京都の昔ながらの風習やそれぞれの祭りの起源も説明されているので、京都観光のガイドブックとしても活用できると思います。

川端康成は京都に家を借りて、舞台となる場所や言葉、町屋の生活取材しました。作中には細かい風景描写がなされており、実際にその地を観光していると感じるようなリアリティがあります。

また、「古い都の中でも次第になくなってゆくもの、それを書いておきたいのです」という川端康成自身の言葉通り、伝統産業の衰退や高度経済成長による街の近代化によって変わりゆく当時の京都の様子が描写されているので、ストーリー以外に歴史を楽しむこともできます。



川端康成が愛したウェスティン都ホテル京都「佳水園」

『有頂天家族』 森見登美彦

人に化けた狸と天狗が、人間社会に紛れて暮らしており、狸界隈の権力争い、各種族間の交流などが京都市内の様々な名所を舞台に描かれているファンタジー作品です。この作品がアニメ化されたものが京都市によって「京都特別親善大使」に任命されました。

著者の森見登美彦さんは「『有頂天家族』では、京都の地名を使って偽物の伝統みたいなものを勝手につくるとことをやっていました。例えば、狸の一族の名前を「下鴨家」「南禅寺家」とかにするだけで、まるで狸たちが先祖代々そこに住んでいる、由緒ある一族のような感じが出るんです」とインタビューで答えています。狸たちは下鴨神社の糺の森などで暮らしていたり、京都四条南座の屋根の上で天狗が決闘していたり、狸が電車に化けて夜空を飛んだりと普通ではありえない設定や、エピソードであっても舞台が京都だったら受け入れることができ、まったく違和感がな



いのはとても不思議です。

TV アニメ「有頂天家族」公式サイト

また、森見登美彦さんは京都大学に通われていたため、京都を舞台とした作品が多くあります。代表作に『夜は短し歩けよ乙女』、『太陽の塔』、『四畳半神話大系』があります。

ここで紹介した作品以外にも京都で生まれた文学は数多く存在します。文学にあまり

なじみのない方でも古典文学を読み、「過去の京都」を想像力を働かせながら読み取ることができれば、十分に京都を味わうことができます。京都の地はそだけでキャラが立つ場所が多いため、ストーリーの中にありのままの姿で描かれることが多くなります。実際に物語の舞台になった場所を訪ねて、作品の世界観を感じとり、「ここで作者や主人公は生活していたのか」と当時の様子を追体験することができるのも、京都の魅力のひとつです。

近年ではアニメや作品の舞台となった場所に訪ねる「聖地巡礼」も人気です。舞台となった具体的なスポットや作中に登場するシーンのイメージを明確にすることで、登場する人物の動きや心情が鮮明になります。写真を撮って自分がその作品の中に入り込んだような感覚になれるのも楽しいはずです。皆さんも京都と文学作品を楽しんではいかがでしょうか。



参考文献

- 『ココロに響く方丈記』 木村耕一 黒澤葵（イラスト） 1 万年堂出版 2018 年
『古都』 川端康成 新潮文庫 1968 年
『有頂天家族』『有頂天家族 二代目の帰郷』森見登美彦 幻冬舎文庫 2010 年、2017 年
インタビュー記事 [最近“僕の京都”を壊しにかかっているんです——小説家・森見登美彦さん【ここから生み出す私たち】 - SUUMO タウン](#)